

小川利雄先生著

『子供のいる国語教室』

岡屋昭雄氏著

『ことばの力と人間を育てる 国語教室の建設』

西 英喜氏著

『問い求め合う国語学習集団の創造』

・広島大学教育学部附属小学校の三人の先生がたが、同時に、同じ判型で、紙数を等量にして、実践・研究の書を公にされた。
三人の先生がたが、附属小学校での実践・研究の原理・基本によりつつ、先生がたのそれぞれの個性・世代を存分に反映された、これらの書を読みおえた今、先生がたの立っておられる実践・研究の場の豊かさ、層の深さを思われないではいられない。

- 小川利雄先生の『子どもがいる国語教室』は、つぎのような構成になっている。
- 一、国語の力をどう捉えるか
 - 二、国語実践力の問題
 - 三、国語科教育課程改造の視点
 - 四、国語科教育課程の内容
 - 五、国語科教育課程の新しい観点
 - 六、授業創造の新しい視点
 - 七、国語の授業の新しい展望のために
 - 八、授業の中で子ども主体性をどう生かすか

九、国語科における小集団学習

- 一〇、表現力育成の問題
- 一一、国語学習・そのパターン化への試み
- 一二、教材開発の視点
- 一三、詩を作ることに問題
- 一四、これからの作文教育
- 一五、実践研究の意味と方法
- 一六、教材・その自主編成へのすすめ

本書の序文で、野地潤家先生は、国語科教育課程の内容は、国語学力の論、国語科教育課程の論、国語科授業の論、国語学習の論、国語科教材の論、表現力育成の論などその幅が広く、奥行きも深い。平明な述べかたながら、どこの分野の論にも、示唆に富む新見・創見がちりばめられており、さらさらと光を放っている。つねにみずからの授業実践に即して、子どもを中心に求めて求められ、どこまでも自力でとり組まれている純粋さが読む者に迫ってくる。

と述べていられる。「幅と奥行き」「平明な述べかた」「新見・創見」「みずから」――本書の特質は、まさに、ここに明らかである。いま、「みずから」のこと、明らかに言え、――の「国語学習」そのパターン化への試み」が、そのことの最も顕著な章である。小川利雄先生みずから、教材文を書きおろされ、その教材文の成立過程（三回の書きかえ）をもまた、この「しぜんのみしぎ」という自主単元の最終展開（〇まとめて発表する／先生のように文しように書く。）で活用しておられる。

ここで、私も、小川利雄先生のばあ、子どもを中心に、子どもたち本位に実践を進められ、その必然として、「教師みずか

ら」に至つておられることを、本書から學ばなくてはなるまい。

岡屋昭雄氏の『人間的な国語教室の建設』

は、つぎのような構成になっている。

第一章 国語教育とは

一 国語教育における「ことば」の問題

二 言語主体形成への視座 三 国語の学力

とことば 四 ことばの教育としての国語

第二章 問い求めること 三 問い求める読み

第三章 国語の授業の条件とは

一 よい授業の条件 二 学ぶ喜びを作る

授業

第四章 話す・聞く実践から

一 話すことばの実践から 二 聞くこ

と・話すことばの練習化

第五章 意欲化を目ざす作文指導

一 意欲的な作文の授業 二 一年生の作

文の発想 三 メモ指導のあり方 四 く

わしく書くこと 五 作文のドリル化 六

表現過程に即した指導 七 表現力を育て

ること 八 書く力を育てる

第六章 読書への広がりや深まり

一 ひとり歩きの読書生活とは 二 読み

聞かせ 三 子どもの読書の広がり

本書の序文で、野地淵家先生は、「岡屋昭

雄教諭の国語教室における各領域活動の扱いは、縦横になされ、多彩であつて活気にあふ

れている。」「それぞれの領域、ごとの各論にお

いて、岡屋昭雄教諭の立論は、いきいきと

ており、自在であつて、読む者に多くの示唆

を提供するであらう。」と述べていら

れた。一論述に際しては、おもいがあふれ、か

えつて多くのものを取りこみすぎた点なしと

しない。」と述べていら

る。ここにまた、

本書の特質が明らかである。

岡屋昭雄氏は、本書の中で、「わたしは、

読み聞かせをする場合には、三十回は朗読の

練習をすることをしている。そして、一回ず

つわたしの感想をメモしておく。(一九二

べ)と述べ、「わたしは、学期に最低一回

が苦勞して書いていくことにしている。(六

五べ)と記しておられる。こうした氏のい

なみが、豊かな読書に結実し、卒業生たち

の証言をみちびき出す。

氏の立論の自在さは、一つには、氏の豊富

な読書量と氏の躍動的な実践にゆりうごか

された卒業生たちの証言とによつて

いる。

西英喜氏の『問い求め合う国語学習集団の

創造』は、つぎのような構成になっている。

第一章 ことばで問い求め、創造する主体づ

くり——国語学習観——

一、「人間」としての自己の生き方に働

く力を二、言語行動主体者として連帯して

いく力を三、「人間」——その理解と表現

を深めていく力を四、国語の新しい学力

としての問い求める力を

第二章 問い求め合う国語学習の方法

一、学習展開上の基本の条件 二、問い求

め合う国語学習の全体構造 三、問い求め

合う国語学習の展開方法

第三章 問い求め合う国語学習の実際

一、入門期の学習指導「なんでもことば

に」から「詩」へ 二—七(各学年の学習

指導)

第四章 実験授業研究による新しい試み

一、思考力を高める話法のあり方を求めて

二、実験授業の構想 三、実験授業の実際

——二年生——「童話」きかん車やえもん

(阿川弘之) 四、国語科比較実験授業に

ついて(野地淵家)

本書の序文で、浜本純逸氏は、「理論的に

追求したものを、さらに、氏は実践によつて

確かなものにしてきた。試行をつみ重ねてい

く旺盛な実践者精神を持っているのである。」

と述べておられる。

本書は、原理・方法(理論・仮説)と実際

(実践・検証)、そして、あらたな実験とい

う横糸と、入門期から六年生までという縦糸

とによつて、じつに、整然と組織されてい

る。

入門期では、経験したことの中に自分のこ

とばを問い求める学習で、詩があつかわれて

いる。一年生以下は、いわゆる物語文教材を

中軸にすえて、一年生では、イメーの展開

に作品のおもしろさを問い求める学習、二年

生では、作中人物像に作品のおもしろさと価

値を問い求める学習、三年生では、問題意識

を高めながら意味を問い求める学習、四年生

では、他者と比較しながら自分の読みを問い

求める学習、五年生では、感動の中に作品の

価値を問い求める学習、六年生では、人物の

生き方に自己のありようを問い求める学習の

仮説と検証がなされている。

西英喜氏の「旺盛な実践者精神」の一例を

四年生の学習での国語学習通信「ひとことび」

(No.7)まで掲げてある。)に見いだすことが

できる。また、書中、数多くの統計が現れ

る。(いずれも、昭52・6・1、学校教育研

究会、佐々木印刷、A5判二一—二二二(一

一七) (中列正巻)